

## 日本スポーツ整形外科学会 2024 (JSOA2024) 開催に向けて

(早稲田大学スポーツ科学学術院 教授) 熊井 司

(早稲田大学スポーツ科学学術院 教授) 金岡 恒治



この度、日本スポーツ整形外科学会 2024 (JSOA2024) を、2024年9月12日(木)、13日(金)の2日間、大隈記念講堂、早稲田キャンパス、リーガロイヤルホテル東京にて開催させていただきますことを誠に光栄に感じ、深く感謝申し上げます。

本学会は、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) と日本整形外科スポーツ医学会学術集会 (JOSSM) がともに歩み寄って設立し、2023年6月には、本学会が新学会として広島で開催され、本会が第2回目の開催となります。JOSKAS ならびに JOSSM の両学会は、医師や理学療法士、トレーナーなどからなる大きな学術団体として発展して参りました。それぞれの学会に独自の特色や伝えていきたい文化があります。これらを大切に生かし、日本におけるスポーツ整形外科のさらなる発展のため、活発なディスカッションができるような企画・構成にしたいと考えております。

今回の学会テーマを「**學**」—スポーツ医科学の学び舎—と致しました。早稲田大学の前身は1882年(明治15

年)に創設された東京専門学校であり、学問の独立と活用を建学の精神とする早稲田大学へと受け継がれてきました。江戸時代から明治初期に普及した初等教育の場としての寺子屋で学んだ子供たちが、より高い専門性をめざして集い、学び、議論を重ね、そして社会に貢献する人となるべく育っていったものと思いを巡らせることができます。ご存知の通り早稲田大学には医学部はありません。しかしながら、140年もの間培われた独立した自由な教育の場としての環境は、唯一無二の存在感を放っています。歴史ある早稲田大学の大隈記念講堂を、社会人のための「**学び舎**」とみなし、初心に帰ってスポーツ医科学の学びに耽っていただくことで、時空を超えた新たなメッセージが生まれるものと願っています。

末筆ではございますが、本学会が医師・理学療法士・トレーナー等、職種の垣根を超えて、活発なディスカッションを通じ、会員の皆様にとって実り多く記憶に残る有意義な学会にしたいと考えております。多くの会員の皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

### 会 告

**会 期** 2024年9月12日(木)~9月13日(金)

**会 長** 熊井 司 (早稲田大学スポーツ科学学術院 教授)  
金岡 恒治 (早稲田大学スポーツ科学学術院 教授)

**テーマ** 「**學**」—スポーツ医科学の学び舎—

**会 場** 早稲田大学 大隈記念講堂 早稲田キャンパス 〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1  
リーガロイヤルホテル東京 〒169-8613 東京都新宿区戸塚町1-104-19

**併 催** 第21回日韓整形外科スポーツ医学会合同シンポジウム 2024年9月14日(土) 大隈記念講堂  
**学会Webサイト** <https://www.huddle-inc.jp/jsoa2024/>

# JSOA-USA Traveling Fellowship 報告記

金沢宗広病院 五嶋 謙一



2023年7月9日～21日までの約2週間、JSOA-USA Traveling FellowshipとしてUniversity of Pittsburg (UPMC)、TMI Sports Medicineを訪問するとともにAOSSM 2023 annual meetingに参加させて頂きましたのでご報告させていただきます。当初、2020年の予定でしたがCOVID-19流行のため延期となり3年ごしの実現となりました。まず初めにこのような大変貴重な機会を与えて頂きましたJOSSMの選考委員および関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

UPMC (7/9～12、ピッツバーグ)

Volker Musahl先生がホストとして、手術見学(QTを用いたACL再建術、MPFL再建、半月板縫合など)、施設見学、早朝のACL meeting、連日のディナー等、この上ないもてなしをして頂きました。私達は残念ながらFreddie Fu先生にお会いすることが叶いませんでしたが、先生のお部屋はそのまま残されており、施設には銅像もありその偉大さに感銘を受けました。またピッツバーグ滞在中は日本から留学中の先生方(山本哲也先生、抽冬晃司先生、井

上淳平先生、矢作義之先生)にアテンドしていただき非常に助かりました。心から感謝申し上げます。



右から山本先生、小川先生、私、Volker Musahl先生、笹原先生、井上先生、矢作先生、抽冬先生

帝京大学スポーツ医科学センター 笹原 潤



7月13日から15日まで、AOSSM 2023 annual meeting @ワシントンDCに参加しました。3人とも発表がなかったため、それぞれが興味のあるセッションを聴講しました。日本からの参加者が少なかった中で、鷹羽慶之先生(名古屋市立大学)と合流し、本フェローの大先輩、田島卓也先生(宮崎大学、2015年に本フェローで訪米)にディナーをごちそうしていただきました(写真1)。いろいろと貴重なお話が聞けて、とても楽しいひと時でした。

最終訪問地のグラスでは、Dr. Keith Meisterがチーフチームドクターを務めているテキサス・レンジャーズのホームゲームにもご招待いただきました。外は40度近くで歩くこともままならない暑さでしたが、開閉式の屋根付きスタジアムの



写真1 左から五嶋先生、小川先生、田島先生、鷹羽先生、筆者

中は快適でした。スタジアムに到着後、なんと試合前のダグアウト裏を案内してもらいました(写真2)。選手スタッフの食堂でディナーをごちそうになった後は特別室から試合を観戦し、最後はレンジャーズのサヨナラ勝ちでスタジアムの盛り上がりは最高潮でした！控えめに言って、最高の夜でした。余談ですが、この後レンジャーズは球団史上初めてとなるワールドシリーズ制覇を果たしました。

このような素晴らしい機会をいただき、関係者のみなさまに感謝申し上げますとともに、本フェローに応募することを学会員のみなさまに強くオススメいたします。



写真2 左から五嶋先生、Dr. Au、筆者、小川先生

水戸医療センター 小川 健



最後の訪問地(2023/7月16-20)TMI Sports Medicineは、今回から初めて訪問先に加わった施設で、肘内側側副靭帯(UCL)再建術について、その適応や手術手技、復帰プログラムなど生で体感できました。Dr. Keith Meisterは年間100例以上の肘UCL再建を手

掛けるテキサスレンジャーズのチーフチームドクターです。3日間の滞在でしたが、初日に4件の見学、2日目は近くのArthrex社の施設で実際にCadaverを使ってUCL再建をやらせて頂きました。3日目も3件、大リーガーもいました。1件1時間もかからず、流行りのInternal braceを使ったUCL再建術は非常に勉強になりました。帰国後、いいタイミングで適応症例がありましたので、早速、同法で手術しましたが、やはり自分が思っていたようにはいかず、研鑽の足りなさを実感しました。今回のこの経験は、言葉に表せない部分も多く、是非とも多くの先生に味わって頂きたい貴重なものでした。一緒に旅した2人の先生はもちろんですが、アメリカで歓迎してくれた方々との繋がりも掛け替えのないものとなりました。この経験を生かし、JSOAの発展に貢献できるよう取り組んでいきたいと思いません。



Dr. Keith MeisterとTMI Sports Medicineにて

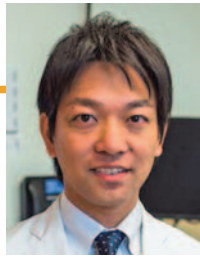


ピッツバーグでの市内観光(左から五嶋先生、笹原先生、小川)



# JSOA-SFA Traveling Fellowship 報告記

京都下鴨病院 下園 由泰



2023年12月2日から12月16日まで、JSOA-SFA Traveling Fellowとしてフランスのパリ、マルセイユ、リオンを訪問させて頂きました。まずパリの Ambroise Paré Hospital では Dr. Thomas Bauer の足の手術や、Dr. Jean David Werthel の肩の手術を見学しました。足の手術は特に外反母趾などの足趾変形手術が多く、MIS パーを頻用して経皮的骨切りを行っていました。中足骨や基節骨などの骨切り部位には固定材を使用せずドレーシングのみで終える独創的な手術方法には驚きました。マルセイユでは、Clinique Juge を訪問し、Dr. Thomas Cucurulo の手厚いおもてなしを受け、マルセイユ対リヨンの熱いサッカーの試合や、食事、観光を存分に楽しむことができました。足の手術も助手として入らせて頂き、アキレス腱断裂の経皮的手術や足関節外側靭帯手術を見ることができました。こちらでも足趾変形に対しては MIS パーによる経皮的骨切りが行われていました。リオンでは Centre Orthopédique Santy を訪ね、美しく無駄のない ALL + ACL 再建術には感銘を受けました。足の外科医の Dr. Ronny Lopes からは鏡視下 ATFL/CFL 再建術を学び、非常に勉強になりました。多くの discussion が出来たことが貴重な時間となりました。どの施設でも Dr. 1人が手術室2つを使用し、ノンストップで1日7~10件手術する効率性が印象的でした。羨ましい限りです。最後に SFA congress では、個性的な術式の発表等が多く、刺激を受けました。

このような機会を与えて頂きました SFA・JSOA の関係者の方々、Godfather の今井先生、そして門間先生に心より深謝致します。



北海道大学病院 門間 太輔



この度、JSOA-SFA traveling fellowship に選出いただき、COVID-19の影響で数年延期となっておりましたが、2023/12/1 から2週間、フランスの3つの都市を回りながら、大変多くの経験をさせて頂きました。French Hospitality を体感する2週間となりましたので報告いたします。紙面の都合上その一部しか報告できないのが残念です。

1 所目のパリでは、Ambroise Paré Hospital の J.D. Werthel 先生による BIO-RSA、ARCR、RSA revision、大胸筋修復など様々な手術を見学させて頂きました。オフの時間には Werthel 先生お勤めの観光ルートを楽しむことができました。

2 所目のマルセイユでは T. Cucurulo 先生に手術見学や観光など幅広くアレンジしていただきました。夜にはサッカー観戦(マルセイユ vs リオン)もあり、身体チェックをしているにも関わらず熱狂的なサポーター席では発煙筒が炊かれ、爆発音が鳴り響き、まさに本場ヨーロッパのサッカーを楽しむことができました。

最終目的地のリオンでは3日間それぞれ A. Godenèche 先生、L. Neyton 先生、L. Nove-Josserand 先生の手術を見学する機会をいただき、さらに股関節や膝、足関節に至るまで普段見学する機会のない手術に触れることができ大きな刺激をいただきました。

SFA congress では発表の機会もいただき、会長招宴では日本への RSA 導入に尽力し「日本 RSA の父」と言っても過言ではない F. Sirveaux 先生の隣の席でお話する機会に恵まれました。翌日の SFA party では夜11時を回るころにダンスをされておりフランス整形外科の力強さを知ることになりました(紙面のため動画を披露できないのが残念です)。

今回、2週間と短い期間ではありましたが、3つの都市を回り、多くの先生方の手術を拝見し、交流を深めることができましたと感じています。最後に、JSOA 選考委員の先生方、SFA の皆様、北海道大学整形外科の先生方、お忙しい中 Godfather としてご同行いただきました今井晋二先生、Fellow としてご一緒しました下園由泰先生に深謝申し上げます。



## JOSKA e-NOTE 廃止と JOANR 今後の運用

山形大学 鈴木 朱美 (レジストリ委員会 委員長)



### 1. JOSKAS e-NOTE の廃止

2009年に関節鏡学会と膝学会が合併し日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)が発足し、2011年から手術登録制度が開始されました。その後、2015年7月からweb登録制度であるJOSKAS eNOTEが開始されました。eNOTEに登録することで、本邦における関節鏡手術の実態や手術内容、症例数やその動向、合併症など、有用な情報が蓄積されることになりました。その後、2020年4月から、日本整形外科学会のレジストリ制度であるJOANRの運用が開始され、その2階部分にeNOTEを配置し、登録を継続してきました。そして、2023年日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)とJOSKASが発展的に統合し、新たに「日本スポーツ整形外科学会(JSOA)」が発足しました。これに伴い、JOANR 2階部分に位置しております「JOSKAS」を「JSOA」へ移行する準備を進めているところです。JOANRが開始されたことで、eNOTEへの登録数は現在かなり減少し、また運用の費用面や登録の煩雑さを考慮し、2024年3月末をもって廃止することを決定いたしました。

### 2. JOANR 今後の運用

JSOAのレジストリに関して、当初担当していただいていた将来構想委員会から、新たに8月にレジストリ委員会を発足させ、その中で、2階部分であるJSOAレジストリの内容について現在検討しているところです。JOSKASでは、関節鏡手術のみの登録でしたが、JSOAでは、関節鏡手術のみならずスポーツに関連した直視下手術の登録も視野にいれながら、また各学会との連携も行いながら、2025年4月運用開始を目標に現在準備しているところです。この新たなJSOAレジストリシステムにより、スポーツ整形外科治療関連のデータ集積や解析がますますすすんでいくことで、日本の手術技術レベルの向上や世界への発信などが期待できます。より良いレジストリとなりますよう、学会全体で検討しながら作成していきたいと思っておりますので、ご協力何卒よろしくお願い申し上げます。

## 今後の学術集会

schedule

**2025年** 会長 菅谷 啓之 (東京スポーツ&整形外科クリニック 医療法人社団 TSOC 理事長)  
会期 2025年9月12日(金)~13日(土)  
会場 ザ・プリンスパークタワー東京

**2026年** 会長 中村 憲正 (大阪保健医療大学 教授)  
会期 2026年9月17日(木)~19日(土)  
会場 大阪国際会議場



# スポーツドクターと国際競技会

早稲田大学スポーツ科学学術院 鳥居 俊



本学会にはスポーツ現場で活動したいと考えている整形外科医が多いと思います。私自身、大学時代の陸上競技部での活動で身体活動と運動器の変化や損傷に関心を持ち、当時（1983年）は卒業後現在のような研修期間はなくストレート入局であったため何科に進むかかなり悩みました。結果として運動器損傷の治療が担当できる整形外科に進み、医局内で部位別に分かれた特別診に対して中嶋寛之先生が主催する全ての部位に対応するスポーツ診に参加しました。このような診療が少なかった当時、さまざまな競技やレベルの選手や愛好家が受診し、損傷のおこるメカニズムや身体の使い方を考えながら診療にあたりました。加えて現場での活動として競技チームや競技団体のサポートに加わる経験をさせていただきました。1990年に北京アジア大会の選手団本部医務に帯同したのが最初の国際競技会でした。水泳など当時から帯同 DR がいる競技以外の試合に分担しての帯同や選手村医務室で選手の診療に対応しました。本部医務スタッフは DR4 名（内科 2、整形 2）と TR4 名で全員男性でした（写真 1）。女性選手は女性証明書を作るため口腔粘膜採取検査を受けなければならない時代でした。代表として参加した選手たちが戦う直前の体調を生でみてコンディショニングやピーキングの重要性を学べたと感じました。

陸上競技は残念ながら帯同 DR 派遣がなく、私自身の日本陸連での活動は科学委員として選手のコンディションチェックとサポートでした。1992年のバルセロナ五輪では、ロンドン郊外での直前時差調整合宿地に最終競技の選手を送り出すまで滞在し、国内での選手決定から競技直前までのコンディション評価を行いました。オーバートレーニング症候群による体調不良の選手を直前にどうすることもできず、年間を通した選手サポートの必要性を痛感しました。この時代、持久系女性選手の無月経や摂食障害、疲労骨折多発という典型的な FAT の実態を調べ指導者や選手への啓発を行う資料づくりも必要でした。

その後、21世紀になって日本陸連も帯同 DR を派遣するこ

とになり最初は 1 名、現在は複数 DR の帯同になりました。責任者として帯同したりリオ五輪ではマラソンが弱体化しリレーや競歩がメダルをとる時代になりました。代表選手には週 1 回のコンディション報告を求めたり、春夏の国内強化合宿に帯同して選手の身近にいて相談しやすい状況を作ったり、など点のサポートから線あるいは面のサポート体制を作るようにしました。

東京 2020 はコロナ禍で延期となり、さらにマラソン、競歩は高温の東京から札幌に、という決定がなされ、私自身は東京の選手村に入ることなく、7月下旬から札幌で事前調整合宿、レース直前に選手村（プリンスホテル）入りとなりました。この年の札幌は全く東京と変わらない高温で熱中症や途中棄権選手が続出し、五輪期間中の傷病発生では陸上競技がトップクラスとなる原因になりました。日本選手も 1 名がゴール後倒れて意識消失し医務室で急速冷却（写真 2）により回復しました。過酷なレース後には長期間の体調不良が続くことも、こうした選手たちをフォローする中で経験し、高強度の身体負荷が内分泌系や自律神経系の状態を損なってしまうことを認識したりコンディショニングを計画すべきことを学びました。

陸上競技に限りませんが帯同する DR は選手やスタッフの健康管理を担っているわけであり、総合診療医や家庭医のような存在が求められます。コンディション異常に対してなるべく早期に相談してもらい対応することで早期復帰が可能になります。相談しやすい関係を構築することも重要です。その意味で、従来の診療科の垣根を越えたスポーツドクター養成の方法も考えていく必要があると思います。



写真 1 1990年アジア大会メディカルスタッフ集合写真



写真 2 2021年東京五輪男子マラソン熱中症治療



# 広報委員会

東京スポーツ&整形外科クリニック 菅谷 啓之  
大阪行岡医療大学 前 達雄



委員は、菅谷啓之担当理事のもと、赤木龍一郎先生、新井祐志先生、落合聡司先生、熊橋伸之先生、田崎篤先生、辰村正紀先生、中村俊康先生、橋本祐介先生、松下雄彦先生と前達雄の合計11名で構成されています。専門分野が多岐にわたるため、委員会では多様な意見がいただけ、本学会に相応しい運営ができる素晴らしいメンバーです。

業務としては、①ホームページの管理、②ニュースレターの作成、③日本整形外科学会スポーツ医学部（JOSSM）より引き継いだ「スポーツ損傷シリーズ」33編および日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（JOSKAS）より引き継いだ「運動器疾患とスポーツ外傷・障害」11編のパンフレットの追加・改訂および管理など、学会の基幹となる重要な部分を担当しています。

## ①ホームページ管理

令和5年3月に委員会が発足したのですが、6月の学会開催までにホームページ（HP）を完成させるという、高難度のミッションに委員で一致団結して現在のHPを完成させました。シンプルかつ機能的なHPですので、ご活用のほどよろしくお願



いいたします。

## ②ニュースレター

4-5月と10-11月の年2回に発行する予定で、春は学術集会の案内、秋は学術集会の報告、さらに本学会行っているトラベリングフェロウシップ（USA、GOTS、SFA、SIAGASCOT、国内施設）や優秀な研究発表に対する表彰（OYIA）の報告記事も掲載します。Spotlightとして、スポーツ関連記事や学会での優秀な発表なども掲載予定ですので、ぜひ毎号楽しみにしてください。

## ③パンフレット

すでにたくさんの疾患を扱っていることから、当面は既存のパンフレットの内容を精査し、必要なものから改訂を行っていく予定です。もちろん新しく取り上げるべき疾患や障害も適宜作成してきます。

広報委員会は、今後も学会の発展に寄与すべく広報活動を行なっていきますので、会員の先生方もご協力をお願いします。



## 編集後記

2024年3月のメジャーリーグの開幕戦ではドジャースに移籍した大谷翔平選手が右肘のけがの影響を感じさせない活躍をみせてくれました。スポーツ外傷・障害で悩んでいる選手や携わっている医療関係者、トレーナーの方々にとって大きな励みになったのではないのでしょうか。大谷選手と関係者に心から拍手を送りたいと思います。さて、昨年6月に発足したJSOAは石橋恭之理事長の強いリーダーシップの下、着実に実績を積み重ね、ニュースレターも第2号を発刊する運びとなりました。本号では本年9月に由緒ある早稲田大学で開催予定のJSOA2024について会長の熊井司教授と金岡恒治教授にご挨拶いただきました。USAやSFAのフェロウ報告では各参加者の海外での有意義な研修をご覧いただけます。特別企画では、長年にわたり陸上競技のスポーツドク

ターとしてご活躍されている鳥居俊先生に国際競技会におけるスポーツドクターの役割についてご執筆いただきました。また、レジストリ委員会から新たなレジストリシステムの構築に向けた活動を、広報委員会からはメンバー紹介と役割についてご報告していただきました。今年がオリンピックイヤーです。スポーツ選手のみならずスポーツドクターの注目度も高まってまいります。また、本学会の社会的役割も重要となってきます。今後も、菅谷啓之担当理事、前達雄委員長のもとでJSOA広報委員会が一一致団結してニュースレターの一層の充実と皆様へ最新の情報をお届けできるように頑張っていきたいと思えます。会員の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

新井 祐志  
京都府立医科大学

